

人はなぜ酒場へいくのか

～現代の酒場に求められる新たな機能～

同志社大学 社会学部社会学科

立木茂雄ゼミ

学籍番号 19061043

宮内 志直子

はじめに

人はなぜ、酒場を訪れるのか。

これは、私があるとある居酒屋でアルバイトをしていたときに抱いた素朴な疑問である。私には、人が酒場を訪れる理由が、単純に飲み食いしたいという欲求によるものだけではないような気がしたからだ。そしてその理由は、酒場の大衆化のあおりを受けて、ますます多様化しているのではないだろうか。

本論文では、ひとりで酒場を訪れる人を対象に、人が酒場に求める機能、また、かつて求めていた機能を、酒場の誕生の歴史にまでさかのぼって解き明かしていく。論文を書くにあたって、調査には文献だけでなく、ソーシャル・ネットワーキングサイト内のログ分析や、自身がアルバイトをしていた居酒屋でおこなった参与観察も用いている。よりリアルな現代の飲み人の生態を記していると思う。

目次

はじめに.....	i
1章 序論.....	3
1-1. 調査の趣旨と背景.....	3
1-2. 先行研究.....	4
1-2-1 酒場の歴史.....	4
1-2-2 酒場の定義と分類.....	9
1-3. 酒場の機能.....	11
2章 データ分析.....	16
2-1 調査方法.....	16
2-2. 調査プロセス.....	17
2-3 分析・考察.....	18
3章 結論.....	19
おわりに.....	20
参考・引用文献.....	24

1 章 序論

1-1. 調査の趣旨と背景

スーツを着たサラリーマンでにぎわう居酒屋。間接照明で照らされたカウンターバー。若者のイッキコールが飛び交う大型チェーン居酒屋。今や、駅前を一目みわたすだけで、すぐにでも何軒もの酒場を見つけることができる。酒を飲むという行為、そのための酒場という場所は、わたしたちにとってかなり身近なものになった。また、最近では、コラーゲンや野菜を多く使用したメニューを売り出すなどして、女性客を中心に人気を集めているところもある。大手の居酒屋チェーン店では、ファミリーレストランで食事をするのに近い感覚で訪れている、家族連れの客も少なくない。かつての、男性客中心といった酒場のイメージはもはや無くなりつつある。女性や子どもも巻き込んだ、酒場の大衆化がすすんでいるのだ。

高田公理は、民俗学者の権威で知られる柳田國男の言葉をかりて、酒は「本来は共同体の成員が共に飲み、その酔いを共有する」（高田 1988:217）ためのものだと言っている。こんにちの酒場の大衆化によって、酒場が人々のコミュニケーションの場として使われることは、きわめて自然な流れといえよう。それと同時に、近頃ではひとりで酒場へ足を運ぶ人の姿もよく見られるようになった。集まって飲む酒の目的がコミュニケーションであるとすれば、ひとりで飲む酒の目的、それも、わざわざひとりで酒場へ出かけて飲む目的とは何なのか。

共同の酒から個の酒へと、人々の酒の飲み方はどのように変化してきたのか。そのなかで、人々は酒場にどのような機能を求めてきたのか。〈ひとりで飲みに行く〉という行為に着目して分析し、現代の酒場に求められる新たな機能を探る。

1-2. 先行研究

まずは、本論文で扱う〈酒場〉という場所について述べなければならない。

酒場とは、酒を飲ませる場所という意味で用いる。海野弘によれば、酒場という言葉は、明治末から大正にかけて使われるようになった（玉村編 1998）。しかし、それ以前に酒場がなかったというわけではない。次項では、酒場の原形となったものの誕生から、それがこんにちに至るまでにどのように変化してきたのかを説明する。

1-2-1 酒場の歴史

①酒場の起源

神代の昔話には、熊襲を少女に扮して酒宴の席で討ったヤマトタケルの話や、やきもち焼きの本妻をなだめるために酒を飲ませた大国主命の話がある。このことから、日本人と酒とのかかわりはかなり古くからあることがうかがえる。

また、酒が登場する神話にスサノオの伝説がある。その伝説の内容は、スサノオがヤマタノオロチに生贄として捧げられる姫を助けるというものである。スサノオは、姫に造らせた酒をヤマタノオロチに飲ませ、ヤマタノオロチが酔って寝ている隙に退治してしまうのだ。

海野は、この伝説を取り上げて、次のように述べている。

日本の酒場の原型はここにある。それは外からやってくる〈まれびと〉（客、神）をもてなすための場だ。……神話の酒場は、神と人が出会う場であり、そこで神秘の酒が供され、神を鎮め、村の人々への恵みを願う。座敷があつて、酒を飲ませてくれて、女性が接待してくれる、という酒場の原形をつくったのだから、スサノオは酒場の発明者ということになる。（玉村編 1998:28-29）

古く昔から、酒を人にふるまうという行為はおこなわれていたようだ。しかし、その時代に酒場と呼べるものがあつたといえる具体的な資料は少ない。

森下賢一によれば、人々が酒を造るようになったのは、稲作農耕を中心とする弥生文化が広まったころという説と、さらに古い、縄文文化のころからとする説があるという。縄文説においては、人々は自然発酵した木の実から酒を知り、次いで、穀物を口の中でよく噛んで吐き出したものを発酵させる、くちかみ酒を造つたと言われている（森下 1992）。やがて、日本の酒はくちかみから麴を利用したものへと発展し、現在に至るまでとなる。

るためには貨幣が必要となり、こうして旅による貨幣経済が広がりを見せる。海野は、「外での飲食は、旅と貨幣経済を前提としている」（玉村編 1998:42）という。

2つ目に、他人からの供給が必要となる状況として、災害・飢饉時をあげている。災害時と飢饉時の例を以下のように述べ、煮売り屋についても触れている。

元禄 13 年の地震の時は、田楽売り（オデン屋）が焼け場に出た。翌年の飢饉の時は、煮売りの小店が出た。煮売りというのは、飯と魚、野菜、豆などを煮たおかずを売る店で、酒も飲ませたから、居酒屋とほとんど区別できない。煮売りにも、行商と店のがある。前者を振売りの煮売り、後者を茶屋煮売りという。（玉村編 1998:42）

また、明暦 3 年の大火のときには、災害後の復興再建のために全国から多くの人々が寄せ集められたと書かれている（玉村編 1998）。災害・飢饉時は被害にあった人々が自給できないという理由で他人からの供給を受けることになるのだが、それ以外にも、復興のために集められた出稼ぎ人が飲食をする場として、酒場が登場することになる。これは、1つ目に述べた旅の理由も含んでいるといえよう。

さきほど、江戸の酒場の総称として茶屋をあげたが、茶屋もいくつかの種類に分かれる。茶屋の分類については、海野の見解を参照にしたい。

まず、よしず張りの簡単な設備で旅人を一服させる出茶屋。これらは仮設の出店であって、たたむことができる。今でいう屋台のようなものだ。くらべて、出茶屋の機能も残しつつ、本格的な建築で奥座敷をもったものを料理茶屋、水茶屋という。水茶屋とは本来、酒を出さないことを〈水〉という言葉であらわしていたが、奥座敷では酒肴を出すこともあったようだ。ここで注目したいのが、茶屋が奥座敷をもつようになった理由である。その当時、江戸には町人の寄り合いや、もめごとの調停などをおこなうための場所がなかったために、茶屋にその場所を求めたというのである。寄り合いに使われる茶屋は立合茶屋、寄合茶屋とよばれていた（玉村編 1998）。

こうしてみると、江戸の土地柄として、全国各地から人が集まる場であり、いわば異文化が集合する場であったことがあげられる。さまざまな地方から、それぞれの文化をもった人が集まる場所ではもめごとも多かったのだろう。江戸における、人々の出会いの場、異文化交流の場としての酒場の存在が浮かび上がる。

飲食中心の料理茶屋、水茶屋のほかにも、男女の色を中心とする引手茶屋、待合茶屋、出会茶屋がある。システムとしては、酒場と遊郭があわさったようなもので、酒を飲ま

酒場として栄えた。今でも吉祥寺のハモニカ横丁といえ、戦後の名残をとどめる酒場として知られている。

ほかにも、終戦後の酒場の多様化のひとつの特徴は、キャバレーやバーが乱立したことだ。女給とよばれる女の接待をうけることができる酒場である。戦争中に禁欲をしいられた男たちが、女との身体的接触や会話を求めて、キャバレーやバーに通った。キャバレーとバーの違いをあげるとすれば、バーのほうが比較的フロアが狭く、客と女のかかわりが会話中心になることだ。こういった酒場に通う男たちは、酒の酔いがもたらす精神の高揚だけでなく、マダムやバーテンダーと会話することによっても不満を発散させていたのだろう。高田は、バーのマダムやバーテンダーを“巷の精神分析医（サイコセラピスト）”と称し、彼らの話術をたたえている（高田 1988）。

昭和 40 年にはスナックが誕生する。東京オリンピックを前にしてできた酒類販売の禁止条例の制約をうけ、バーの代替物としてできたものである。ほとんどその性質はかわらない。しかし、スナック以前は主に女給やマダム、バーテンダーといった、店員と客とのかかわりに焦点がおかれたのに対し、スナックでは見知らぬ客同士でもかかわりをもつようになる。そこで交流を深めあった客は、酒場を媒介としたちいさな社会をつくりだす。

しかし、石油ショックが起こった昭和 48 年以降、酒場はその姿と性質を大きく変えていく。スナックにはカラオケ設備が普及し、酒場とダンスホールの間形態をとったディスコの登場。もうひとつは、ピンク・サロンの増加である。キャバレーやバーも女の接待の機会を含んではいたが、ピンク・サロンは言語的コミュニケーションを省き、直接的な性のサービスに比重が置かれている。こうなると、酒を飲ませる場所という意味では酒場といえるのだが、もはやそこでの目的は酒を飲むことではなく、歌うこと、踊ること、性的行為といった、酒以外の別のものに向けられている。そしてそこでは、他者との言語的コミュニケーションは軽視される傾向にある。

昭和 50 年代にはカフェ・バーや大衆居酒屋が盛り上がりを見せる。カフェ・バーとは酒類、ソフトドリンク、軽食やデザートを洗練されたインテリア空間で提供することを売りにした酒場で、主に若者のつどいの場となったようだ（高田 1988）。これらの酒場に共通してみられる特徴は、見知った者同士によるコミュニケーションを深めるための場として利用されていたことである。そこでおこなわれたのは、店員と客の癒しの会話でもなく、見知らぬ者同士が結ぶ新たなかかわりでもなく、連れ合い同士で完結する会話や行為であった。この当時、大型チェーン店などの大衆居酒屋でよくみられた“イッキ飲み”の光景はその代表的な例であろう。それは自分が所属する集団のなかでのみ

な酒場とする。昭和初期にみられた女の接待を付加価値としたキャバレーや性交渉を目的としたピンク・サロンは“女特化”した酒場、スナックは客同士の会話、情報交換に比重がおかれていたことから“よろず情報特化”した酒場、ディスコやカラオケは“音楽特化”した酒場、ビアホールや、酒も料理もだすカフェ・バー、メニューの豊富な大衆居酒屋などは“酒・食べ物特化”した酒場といった具合に分類される（高田 1998）。

③本調査における〈酒場〉

分類をしたうえで、次に本論文の調査ではどこまでを対象とするかを規定する。規定に際しては、風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律（以下、風適法）を参照にした。

まず、キャバレーは高田の定義では、必要な要素がそろった酒場であると位置づけられている。しかし、風適法第二条では「キャバレーその他設備を設けて客にダンスをさせ、かつ、客の接待をして客に飲食をさせる営業」と表記され、風俗営業という位置づけである。ここで重要なのは“接待”という言葉がもつ意味で、風適法では「『接待』とは、歓乐的雰囲気醸し出す方法により客をもてなすことをいう」と定めている。また、警察庁ホームページの風適法の運用解釈基準では、客に対して営業側が積極的な行為として、単なる飲食に通常伴う役務の提供を超える会話やサービス行為をおこなうこととしている。“接待”にあたる例として、「特定少数の客に近くにはべり、継続して、談笑の相手となったり、酒等の飲食物を提供したりする行為」、「客と身体を密着させたり、手を握る等客の身体に接触する行為」をあげている。つまり、“接待”という言葉は風適法のなかで性的な意味合いをもつ言葉として使用されている。

これに対し、バーは「喫茶店、バーその他設備を設けて客に飲食をさせる営業で、国家公安委員会規則で定めるところにより計った客席における照度を十ルクス以下として営むもの」、「他から見通すことが困難であり、かつ、その広さが五平方メートル以下である客席を設けて営むもの」とし、“接待”という言葉は含まれおらず、問題とされるのはその低照度性と個室性である。ここでは、客と営業側の性的かかわりの可能性が不安視されてはいるが、“接待”の有無に関しては明記されていない。

ピンク・サロンにいたっては、「個室を設け、当該個室において異性の客の性的好奇心に応じてその客に接触する役務を提供する営業」をする「店舗型性風俗特殊営業」に位置づけられている。“性”風俗という言葉が使われていることから、性的サービスを主な目的とした店であることが読み取れる。

以上、“女特化”した3つの酒場を比較し、調査対象を規定するうえで基準にしたい

ではないかと感じてきた。とりわけオモニをはじめとした女性の力は、その役割の大きさに比べると、これまで朝鮮学校に関する研究ではあまり論じられてこなかった。その辺りを実証的に明らかにすることを、調査の課題とした。

調査対象と方法は次のように設計した。

(1) 保護者の調査

現在子どもを第三初級に通わせている保護者の調査を実施する。中心となったのは学校運営を支えているオモニ会の活動についての調査である（そのため、この調査チームをさしあたり「オモニ会班」と称していた）。調査方法は調査対象者へのインタビュー調査と同時に、オモニ会の活動に調査者自身が参加しながら記録する参与観察 (participant observation) もおこなった。

具体的には、次のとおりである。

- ①オモニ会の現任会長その他何人かのオモニたちにインタビューを実施した。
- ②授業参観をはじめ、体験保育や、全体給食、サマーフェスタ、チェサミ祭、図書部での読み聞かせ、さらにはオモニ会の役員会にも参加させていただくなど、オモニ会の参与観察をおこなった。さらに、校内保健室をつくるための準備やオモニ会主催のバザーにも関わった。
- ③アボジ会についても、現任会長にインタビュー調査を実施した。

(2) 教員の調査

現在、第三初級で働く教職員の調査を実施した（調査チームは「教員班」と称していた）。教員班では京都第三初級学校の現任教員が、献身的な教育活動をおこなっているとの予備的な観察にもとづき、その中身を具体的に明らかにするために調査をおこなった。調査方法としては、インタビュー調査とアンケート調査を併用した。

具体的には、次のとおりである。

- ①インタビュー調査では 2007 年度のライフヒストリーの蓄積に追加し、校長先生をはじめ複数教員にそれぞれ数回のインタビュー調査を行った。
- ②調査票にかんしては、(4)で詳述する生活実態調査をベースにししながら、教員独自の項目を付け加えるなどして作成した（附録を参照のこと）。その際、日本の既存の調査との比較を念頭に、項目を設定した部分もある。

ド上で分けられていなかった。その点を修正したうえで、簡易化して用いた。

現在の保護者世帯総数は 40 世帯あり、学校を通じて調査票を配布・回収した。プライバシーに関わる内容を含むため、調査票は封緘付きの封筒で回収した。やや煩雑な項目を含んでいたためか、回収できたのは 25 世帯分であった。

(5)その他の調査

第三初級の沿革については、2007 年度の調査の蓄積があるので、その素材を活用した。

官庁統計については、京都市統計書、国勢調査報告書、外国人の在留管理や登録に関する統計書、また京都の韓国籍・朝鮮籍の出生・婚姻・死亡の人口動態統計、そして教育調査統計などを分担して収集・整理・分析した。

京都を中心とした在日朝鮮人史については、先行研究をもっぱら利用した。そのほか 2009 年が 4.24 教育闘争(いわゆる阪神教育闘争)から 60 周年であったことから、5 月 11 日(日)に同志社大学で「4.24 教育闘争 60 周年 演劇とパネルディスカッション 京都・滋賀の民族教育」というイベントが開かれ、実習クラスとして参加した。

調査は大まかに次のようなプロセスで進めた。

2008 年 4 月の段階では、以前の年度の報告書を読んだり、在日朝鮮人の民族教育に関するドキュメント映像²を見たりした。そのうえで 4 月 27 日(土)に実習クラスで京都第三初級学校の「授業公開」を見学し、予備的な調査をおこなった。授業公開終了後、姜秀香校長先生に基礎的な事実関係に関わるインタビューを実施した。

5 月に入り、「教員班」「オモニ会班」「ハルモニ班」に班分けをおこなった。また分担して、大学図書館、京都府立資料館、京都市役所、京都市教委・府教委などに赴き、官庁統計を収集・整理した³。さらに、在日朝鮮人のエスニシティとジェンダーに関わる諸文献を読み、研究動向を把握した⁴。京都の在日朝鮮人については京都大学人文科学研究所の水野直樹教授のレクチャーを受けたほか、京都市の外国人教育政策について

² 民族教育に関わる映像作品としては、2006 年に自主制作した「チェサミ！ 京都朝鮮第三初級学校の日」(監督=辻野理花、制作=板垣竜太)、2007 年に第三初級 40 周年を記念して自主制作した「京都朝鮮第三初級学校 過去～現在～未来」(構成・脚本=趙弘子、制作=板垣竜太)、2003 年にフジテレビ系列で放映された「ウリハッキョ：民族のともしび」(制作=テレビ愛媛)、1955 年に公開された「朝鮮の子」(演出=京極高英、呂運珪ほか)などを順次観た。

³ 在日朝鮮人の官庁統計を収集するに先立ち、在日朝鮮人統計そのものの性格を知るためにも、森田芳夫『数字が語る在日韓国・朝鮮人の歴史』を全員で読んだ。

⁴ 戦後在日朝鮮人女性史については宋連玉(2002, 2005, 2006)を読んだ。また、朝鮮学校をジェンダーの観点から論じた韓東賢(2006)を読んだ。

2章 データ分析

2-1 調査方法

2章においては京都における朝鮮人社会について概観する。また同時に今回の調査の対象となった京都朝鮮第三初級学校の創設期から現在についても、当章で扱うものとする。

まず第一項の『京都の在日朝鮮人社会』では、戦前から戦後にかけての在日朝鮮人にかんする歴史的・統計的な資料にもとづいて分析をおこなっている。そこから戦前から戦中にかけて、近代化が進展していく京都市における朝鮮人の定住過程を明らかにしている。また現在研究が不足している戦後期の京都市の在日朝鮮人についても触れている。

次項『朝鮮学校の位置づけ』においては、日本社会における民族学校の位置づけ、とりわけ朝鮮学校の処遇について述べられている。ここでは民族教育に関する制度的変遷を調べ、同時に日本と朝鮮民主主義人民共和国との関係についても考察している。また京都以外の他地域での朝鮮学校のありようについてもここで述べている。

そして今回の調査実習の舞台となった「京都朝鮮第三初級学校」（通称、第三初級、チェサミ）についての歴史的な歩みについては、『京都朝鮮第三初級学校の概要』の項で扱っている。著者の2008年4月からのフィールドワークを通してえられた体験や、そこで出会った方々のインタビューデータを用いて、40年にもおよぶ第三初級学校の歴史や現在の状況、学校が抱えている問題についても豊富に論じている。

以上を整理して、当章が今回の社会調査実習の舞台となった地域や組織、また人々についての読者が概要的知識を得る手がかりとなることを期待する。

表2-2 国勢調査による在日朝鮮人職業

職業 (小分類)	京都市全体 (a)	うち朝鮮人 (b)	(b)/(a)
染色工、捺染工	20269人	1526人	7.50%
機織工	16243人	665人	4.10%
土工	1902人	985人	51.80%

出典：内閣統計局『昭和5年国勢調査報告』

また、京都市在住の朝鮮人は地域ごとによって職業の特色があった。たとえば、楽只、養正、錦林といった、いわゆる合併前の旧市域では自由労働者が比較的多かったのに対して、その周辺部、つまり新市域と呼ばれる伏見区や下京区では西陣織や友禅染など各種職工に従事する人が多かった。

2-3 分析・考察

1945年8月に日本はポツダム宣言を受け入れ敗戦した。そしてアメリカの支配下に置かれ、「韓国併合ニ関スル条約」は無効となり、朝鮮半島は解放された。それにとともに、京都に住んでいた朝鮮人の3人に1人は朝鮮半島に帰還していった。

だが、朝鮮半島の南北分裂や、日本から朝鮮半に持ち出せる資金に制限がつくなどのことから、日本に残留する朝鮮人が現れた。これが戦後の在日朝鮮人社会を形成していった。

※ここに朝鮮問題研究からのデータを使用

戦後の京都での主な居住地域は南区、右京区、そして伏見区であった。表2-3でわかるとおり、1985年までは京都市における朝鮮人の人口は増えているが、1985年以降は減少していつている。これには様々な要因があると考えられる。

第一に1985年を境に在日朝鮮人だけでなく京都市の総人口も減少している。つまり、これは在日だけの現象ではなく、京都市全体の減少と捉えることができる。しかし、1985年から2004年の減少率で比べた場合、京都市の総人口が1.0%と減少率が微々たるものに対して、朝鮮韓国籍人口は22.7%と激減している点で大きな違いがある。

第二の要因は国籍である。日本国籍を取得した場合（いわゆる「帰化」）や、在日朝鮮人と日本人の間に生まれた子供（いわゆる「ダブル」）を日本国籍にした場合、日本における朝鮮籍は減少する。表2-6をみてもわかるとおり、1984年を境に朝鮮籍の子は激減している。このことからダブルの子供が増加しているものと考えられる⁷。

⁷ 厚生労働省の調査では韓国籍と朝鮮籍を足して統計しており、韓国、朝鮮の単独の統計データはないため、断言はできない

おわりに

本章では、保護者とくにオモニたちの学校への関わり方を検討していく。京都朝鮮第三初級学校の創設期からオモニたちの助力は、多大なるものだった。全国の朝鮮学校に必ず「オモニ会」が存在する。オモニ会の歴史は古く、1940年代からその存在が認められる⁸。京都朝鮮第三初級学校の場合、「オモニ会」という名称としては1980年代にスタートしているが、実質的には学校創立間もなく結成したとあってよい。一方の「アポジ会」結成は、2000年に入るまで待たなければならない。朝鮮学校の歩みは、常にオモニたちの活動が「支え」てきたと言っても過言ではない。

では、なぜオモニたちが中心的な役割を担ってきたのであろうか。オモニ会が設立する前後から、彼女たちの活動を追跡し、さらに現在の活動に入り込み細部まで探ることによって、オモニならではの学校への関わり方がみえてくるはずである。オモニたちを規定している社会的規範や、さらに政治的情勢を背景としたオモニたちの意識や関わり方の変容が窺われるだろう。

しかしながら、創設期から現在に至る保護者の活動について知ることのできる歴史記録は、皆無に等しい。創設期前後に携わっていたオモニ、創設後のオモニ会に参加したオモニ、そして2008年現在現役で活躍するオモニたちのインタビューを通してのみ、学校を「周辺」から「支える」オモニたちの歴史や思いを叙述するしかない。

ただ、創設期のオモニは、在日朝鮮人1世あるいは2世代前半にあたるので、高齢化によってインタビューすら難しくなっている。今回のインタビュー調査では、趙弘子教諭の大変なご尽力により、インフォーマントを探してくださったが、体調不良のために受けていただけないこともあった。また、自身の話を語るということに、躊躇される方も少なくない。インフォーマントにたどり着くまでが、大きな課題だったと言ってもよいだろう。1990年代、戦争被害者などが語り始め、「証言の時代」とも呼ばれているが（徐・高橋2000）、いまだ語ることのできない、「沈黙」が存在しているのだ。

そこで、既に出版されている聞き取り記録⁹なども参考にしながら、今回取り組んだ

⁸ 東京都荒川区にある東京朝鮮第一初中級学校の創立五十周年記念写真集に、「第七回オモニ会記念 東京第一朝連初等学校」と記載された集合写真がある(ウリハッキョをつづる会 2001)。この写真の撮影年月日が「一九四七年六月十五日」と記されており、朝連時代からその存在が認められる。

⁹ 数々の研究者や活動家たちの手によって、聞き取り記録や証言集が刊行されてきたが、女性に

朝鮮学校増設運動に携わっている。日本社会での差別がより強固なものとなっていく中、在日朝鮮人たちの期待は祖国に向いていた。彼女たち自身も「成人学校」で学ぶことによって、「民族」の主体を確立することはもちろん、祖国の「在外公民」としての「独立性」を構築しようと求めた運動であったと言える。80年代は、帰国運動も沈静化し、日本定住志向が高まり日本の学校に就学する子どもが増える中、「差別」と「同化」からの「解放」を主張するとともに、学校を維持していくことに集中せざるを得なくなった。それでも、健在である1世代の援助により活気を保っていたが、3世代が中心となる90年代に入ると学校運営さえ厳しいものとなる。宣伝される「朝鮮」のマイナスイメージは、日本社会にますます定着し、在日社会においても分裂をもたらした。

第3に、上記2つの要素とも絡み合って、オモニたちの民族教育に対する意識の変化がみられる。草創期のオモニたちの置かれた状況下での売店活動の目的は、「革命歴史教室」設置であった。祖国に希望をみた彼女たちの思いが、具象化したものだったのでないだろうか。祖国に貢献する子どもたちを育成する学校を支えてきたのである。80年代は、帰国事業の終了でこうした動機付けよりも、「学校のため」というような傾向が強いように思う。この時期に、オモニ会が結成されていることも見逃してはならない。草創期は、組織されなくても積極的に運動に参加していくものが存在したが、この頃は日本での民族教育を確立する上で、オモニたちの組織化と結束力を強く求めなければならなかったのであろう。90年代では、「子どものため」という意識に移行していく。当然これまでも子どものために活動していたわけであるが、学校の再建強化という課題に追われていた。しかし、ますます強まる経済的な負担や設備不足など、親たちの自由な選択肢はかなり限定されている。そのような切迫した状況下では、「日本人の学校と同じ条件で学ばせたい」という環境整備に対する意識が強くなっていく。

第4に、オモニたちの活動の具体的な内容の変化である。日本政府による制度的な差別状況下では、運営資金を収集するためのさまざまな活動は、一貫して変わらない。しかし、学校運営以外に親たちが望む理想の「学校」は変化しているし、またそれらを実現していくための具体的な実践も変化している。草創期のオモニたちは、繰り返しになるが祖国と密接な繋がりがあった。「革命歴史教室」は象徴的な例だ。80年代になると、オモニ会の結成によって、朝鮮学校自体の運営維持が中心となっていく。学校の財政的なバックアップをするために、バザーをはじめとする収益活動の結果、スクールバスを購入している。90年代には、運営も厳しくなるものの、日本の学校と同等の条件を求めて、運動が展開されていることが特徴的である。1994年のJR通学定期割引率差別是正運動では、署名活動に参加している。また、日本の学校では設備されている給食や

参考・引用文献

- 秋本宏,2001,「暖簾くぐるとそこには安らぎ—居酒屋は働く男たちのセーフティネット」『Yomiuri Weekly』60(32):30-36
- 木村聖哉,1973,「男が酒を呑むとき—酒場家族考」『思想の科学』6(14):100-106.
- 高田公理,1988,『酒場の社会学』PHP 文庫.
- 玉村豊男編,1998,『酒場の誕生』TaKaRa 酒生活文化研究所.
- 橋本健二,2008,『居酒屋ほろ酔い考現学』毎日新聞社.
- 森下賢一,1992,『居酒屋礼讃』毎日新聞社.

- ソーシャル・ネットワーキングサイト mixi(ミクシィ),2009 閲覧,
(<http://mixi.jp/>)
- 警察庁「風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律関係」
(<http://www.npa.go.jp/index.html> 2009.12.22)

論文タイトル：「人はなぜ酒場へいくのか～現代に酒場に求められる新たな機能～」

社会学部社会学科 19061043 宮内志直子

キーワード：酒場、大衆化、共同体、自己目的、

《要約》

古来から続く人と酒のかかわり。そのなかで、人が酒を飲む場所—酒場—も大きくその姿をかえてきた。なぜなら、人が酒を飲む理由が時代とともに変化したからである。人が酒を飲む理由はそのま酒場の姿へと反映される、つまり、酒場の変遷をたどることで当時の人々が酒場に求めたもの、酒場が社会で果たしていた機能がうかがえる。太古の共同体による酒宴の場から、近代の自己目的の場へと変化を遂げた酒場。〈ひとりで飲みに行く〉というきわめて現代的な行為に焦点をあて、ソーシャル・ネットワークワーキングサイトのログ分析と参与観察を用いて調査する。これまでの酒場の機能では補え切れなかった、現代人が求める酒場の機能とは何か。そこには、普段何気なく足を運ぶ酒場にもわれわれは潜在的にこんな機能を求めていたのか、という驚きと発見があった。